



浄土真宗西福寺別院 熟柿庵  
平成二十九年十月第百十四号

最後におたよりをお送りしてから早や半年近く経ってしまいました。そして今年もあと二か月となりました。「ああ、今年一年なにをしてきたんだろう」とふっと思ってしまうのですが、振り返るのはあまり身体に良くなさそうなので、なるべく前を向いてまいります。

## ルンバ

タンゴじゃなくて、ジルバでもなくルンバのお話です。

先日、檀家さん宅で掃除機のルンバを初めて見ました。購入されたのは子育て真っ最中の若いお母さん。看護師の仕事で忙しく、ちよつと高価でしたが思い切って購入されたとのことでした。

「なんか形が地雷に似ていますね」

「そうなのです。最初は地雷探知のために開発されたらしいのですが、転用されて掃除機になったのです。これ、とても便利なんですよ。外出先からでもスマホで操作できるのです。部屋の形状も学習していて、それに動いた軌跡も全部記録されて、部屋が隅々までまんべんなく掃除されていることがひと目でわかります。

実は数日前、子供に発疹が出て医者に診てもらったのですが、ダニが原因とのことでした。ダニは畳や小麦粉にも含まれているとのこと。ルンバを買ったのはそのためでした。将来、学校に行くようになったら体育で使うマットもダニがいつぱいで危ないと云われました。気を付けるように言われましたが、気の付けようがありません。」

「ダニなんてそこら中にいますよね。いちいちダニを気にしていたら何にもできないですね。うむ、できることなら、いつそお子さんの体質を変えれば良いのでしょうか、無理ですかね。」

「いいえ、今、体質を変える治療を開発中らしいです。」

「え、どんな？」

「ダニの成分を体に注入する方法らしいです。それで抵抗力をつける。考えてみれば人間っておかしいですよ。長年ばい菌や害虫のいない清潔な生活を求めてきたのに、清潔な生活になったと思ったら、かえって身体の抵抗力が弱くなって、強くするためにまた害虫を体に入れるなんて。」

確かに彼女の云うとおりです。最近は除菌や殺菌という名前のついた製品がそこら中にあります。だけどあまり清潔にしすぎると返って身体に良くない結果をもたらしたりします。

花粉症というのもそのたぐいの症状らしいです。花粉そのものには毒はないのに鼻水や涙やかゆみが出て辛くなってしまふ。もともと人間には免疫作用が備わっていて外敵を排除する働きがあるのですが、環境があまりに清潔すぎると戦うべき敵がいなくなってしまうって、いわば免疫がひまをもて余して花粉を外敵と見なして無益の争いをしかけ、排除しようとするのです。そのために鼻水や涙がでたりするというこのようです。花粉が悪いわけではありません。

「清潔なほうが良いに決まっている」その言葉に疑問を持つことなく私たちは長年暮らしてきました。だけど発疹や花粉症など、思いもかけない負の副産物があらわれてきました。

副産物があらわれた今になってあらためて思えば、清潔にするというのも、度が過ぎると返って身体のバランスを崩すということもわかってきました。が、当時は不潔にしていたことで病気になるたりしたわけですから、清潔さを求めるのは当然のことで致し方ありません。遠い将来どういう事態になるかという心配より今の問題をどう解決するかということのほうが大事です。これは私たち人間のくせです。それに、遠い将来を予測するなど人間には至難のわざです。

話は変わりますが、

むかし、学校で歴史の授業で、封建時代から近代になり民主主義の時代になって人間は自由に生きられるようになって良くなったと教えられました。確かに身分制度はなくなり、結婚も自由にできるようになり、職業も自由に選択できるようになりました。自分で自分の人生を切り開けるようになったのは確かに良いことです。しかし自由になつたということは何事も自分で判断して決めなければならぬということでもあります。そして自分で決めるといふことはその決めたことに自分で責任を負わなければならないということです。これは自分というものがよほどしっかりしていないとかえって苦痛になったりします。明治の文豪夏目漱石が生涯をかけて悩んだのも「自分は独自のしつかりしたものの方をもっているか。その考えに責任をもって生きていけるか」ということでした。そのことは今でも大きなテーマです。特に若者にとって「自由な時代だから将来になんてなってもいいんだよ」というのは精神的な苦痛につながったりもします。多くのことに縛られて生きている人にとっては、そこから逃れて自由になることは希望であるに違いありません。だけど自由を手に入れた途端にその自由であることに悩まされるといふことは思いもかけなかった副産物となります。

掃除機ルンバからとんでもないところへ話が行ってしまいました。

## 『サピエンス全史』 上下巻

著者のノア・ハラリ氏は一九七六年生まれの歴史学者。ホモ・サピエンスである私たちの十五万年の歴史を巨視的にいろんな切り口で語っていてとても興味深い本です。最初に、何万年も続いた狩猟採集生活が終わり、そしてつい一万年ほど前から農耕生活が始まったのはなぜかと問い直す。川で魚を採り、野山で木の実や獣をとって、つまりは自然のものを採集して暮らしてきた私たち人間が、大地を耕して小麦や米などの食料を生産するという生活に移ってきたのはどうしてか。そしてそれはどういう意味をもつか。

学校で習った歴史では農耕生活をするようになって安定した食料が得られ、人口も増え定住生活ができて安定した生活ができるようになって人類の歴史は前進したのだと教えられてきました。

本書はこの考えを土台からひっくり返します。

「農業革命は安楽に暮らせる新しい時代の到来を告げるにはほど遠く、農耕民は狩猟採集民よりも困難で満足度の低い生活を余儀なくされた。狩猟採集民はもつと刺激的で多様な時間を送り、飢えや病気の危険が小さかった。人類は農業革命によって手に入る食料の総量をたしかに増やすことはできたが、より良い生活やより長い余暇には結びつかなかった。農耕民は狩猟採集民よりも苦勞して働いたのに、見返りに得られる食べ物は劣っていた。農業革命は史上最大の詐欺だったのだ」

「農耕によって椎間板ヘルニアや関節炎などのじつに多くの疾患がもたらされた。」

「何か月もかけて穀物を育てなければならぬのでストレスもたまるようになった」

「狩猟採集民は農耕民よりも、飢えたり食料不足になったりすることが少なく一般に背が高く健康的だった」その理由は

「食物の多様性にあった。農民は非常に限られた、バランスの悪い食事をする傾向にある。特に近代以前は農業に従事する人々が摂取するカロリーの大半は小麦、ジャガイモあるいは稲といった単一の作物に由来し、それらは人間が必要とするビタミン、ミネラルなどの栄養素の一部を欠いている。これとは対照的に狩猟採集民は平素から何十種類もの食べ物を口にしていた。朝食にはさまざまなベリーやキノコを食べ、昼食にはカタツムリ、カメを食べ、夕食にはウサギのステーキに野生のタマネギを添えて食べたかもしれない。このような多様性のおかげで、必要な栄養素をすべて摂取することができた。」

このように狩猟採集生活の利点が多く述べられています。それなのになぜ人類は農耕生活を歩みだし、今日に至ってしまっているのか。おそらくその答えが本書のテーマです。

下巻では科学革命を中心に語られています。その中で「ギルガメッシュ・プロジェクト」のことが紹介されていました。ギルガメッシュとは四千年前のメソポタミア文明に出てくる王様の名前で、彼は死なない方法を求めていたと云います。それが現代の科学者たちによって真面目に研究されているというお話です。

いったい人間はどこに向かって進んでいくのでしょうか。

「サピエンス全史」は三部作になっているらしく、最後の一巻のタイトルは「ホモ・デウス」です。これはまだ日本語訳されていないので読んでいません。原文を読んだ人が「この『ホモ・デウス』の本こそが著者ハラリのいちばん云いたかったことではないか」と言っていました。翻訳されるのを楽しみにしています。

## ご案内

★ 「歎異抄にまなぶ会」のご案内

十一月二十五日（土曜日）午後六時半から熟柿庵にて行います。最初に坐禅から始まります。どなたもご参加して頂けます。会費千円。

★ 築地本願寺合同法要のご案内

十二月二日（土曜日）午前十一時より築地本願寺の法要施設「琥珀の間」にて築地本願寺納骨堂西福寺区画に埋葬されている方の合同法要を勤修いたします。ご家族関係者の皆さまのお参りをお待ち申し上げます。

尚、当日は築地本願寺本堂の右側受付所前にご参集いただき、それから「琥珀の間」へご案内いたします。

… … …

☆ 西福寺報恩講

十一月四日（土曜日）午前十時と午後一時半の二回、親鸞聖人の御命日にお勤めする報恩講（ほうおんこう）を滋賀県彦根市の本院西福寺にて勤修致します。特に午後の「大速夜」の法要は「奉讃太子作法」に準じて行われます。毎年このことながらお経の独特の節回しに苦勞します。お知らせまで。